



「高校生サバイバー」と出会ったら「虐待がもたらすもの」

一般社団法人officeドーナツトーク

とくしま開設準備担当 辻田 梨紗さん

阿南市の花「ひまわり」の花言葉は、「光輝く」です。人権について考え守っていくことが、まさに光り輝く阿南市づくりにつながります。人権教育・啓発コーナー「ひまわり」では、人権に対する思いを掲載していきます。

虐待と聞くと、小さな子どもが犠牲になる、行き過ぎたしつけの末に起こる悲しい事件をイメージされる方も多々と思います。確かに、市町村や児童相談所が対応するケースは、比較的小さい子どもが虐待状況に置かれているケースが多いかもしれません。しかし、虐待によって亡くなってしまう子どもがいる一方で、虐待されながらも生き抜いて大きくなる子どもたちもたくさんいます。ある子はそのままその家庭で育ち、ある子は施設に入所するかもしれないし、私は、大阪の西成というエリアを中心に、虐待を受けながらも生き抜いて高校生になった「高校生サバイバー」と出会い、関わってきました。

その「高校生サバイバー」と出会うのは、高校の空き教室を借りて開いた「カフェ」です。お昼休みと放課後、

飲み物を用意して待っていると、たくさんの生徒さんがカフェを訪れ、たわいもない話から家庭のことまで、さまざまなことを話してくれます。カフェに来てくれるのは、何かしらの課題を抱えながら生きている生徒さんです。カフェで少し愚痴をこぼして、ドリンクで一息ついてから、教室やアルバイトに向かいます。その中で、高校を離れた後も何かしらのフォローをさせてもらう生徒さんも毎年、数人います。

「虐待」という言葉からイメージされるほど過酷な環境ではなくとも、「適切ではない養育環境」で育ってきた若者は、高校を卒業、もしくは中退した後、公的なセーフティネットが十分とは言えない世界をまた、生き抜いていかなければなりません。

虐待や不適切な養育環境で育った「サバイバー」は、高校を卒業できれ

ばまだ良い方かもしれません。高校をやつとの思いで卒業したり、高校を中退し、通信制高校等に通う人もいます。小さい頃から家庭が安心できる場所でなかった場合、集中を維持したり、記憶を保持したりする力が十分でなく、知識や学力が定着しにくいことがあります。そうなる、ただでさえほかにやりたいことがある10代の若者にとって、勉強は楽しいものではなく、とても苦しいものになります。家庭で暴力を振るわれたり、十分に食事を与えられていないと、学校で学ぶことより毎日をどう生き抜くの方が子どもにとって重要で、毎日授業は受けていても、理解できず、学力が身につきません。授業に出席していれば中学までは幸か不幸か卒業できてしましますが、この学ぶ力の低下や一見すると低学力であることは、虐待や不適切な養育環境を生き抜くのと引き換えに失ったものであり、個人の責任の問題ではありません。

また、虐待や不適切な養育環境で育った場合、心身の不調が出てくることもまれではありません。偏頭痛や虫歯などの場合もあれば、無気力やうつ、パニックなど精神症状として現れる人もいます。しかしそれは、人間として「正常な反応」です。症状が重いと、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状ととらえて、本来は専門的な治療を受ける

べきですが、本人も周囲もPTSDの症状であると気づかないことの方が多々あるかもしれません。特にPTSDは、ある時までには普通に過ごせていても、突然、何かのきっかけで症状が表面化し、これまでできていたことができなくなり自信を失い、症状が長期化する場合があります。本人も周囲の人も非常に辛い思いをします。

虐待や不適切な養育環境は、そこから逃れた成人以降も重荷となつて「サバイバー」の背中へのしかります。集中が続かない、新しいことを覚えにくい、体調が安定しない、となると、長期的な就労は非常に困難なものです。セーフティネットが機能しやすい高校生までに、その困難が発見され、手厚いサポートを受けられたら、また違う道が開かれるかもしれません。そのためには、まずは「サバイバー」の発見やサポート体制の整備、それを支える世論、空気の醸成が必要です。もしかすると、皆さんの側にも「サバイバー」がいるかもしれません。「すぐに調子を崩す迷惑な人」「仕事ができない厄介な人」ではなく、「サバイバー」かもしれない、と考える視点が必要で、彼ら彼女らを救うセーフティネットになると信じています。

問い合わせは

人権・男女参画課

(☎22-3094)へ

